

海を照らす灯台のなかまたち（４）

～三机港須賀防波堤灯台（みつくえこうすがぼうはていとうだい）～

三机村は、1955年（昭和30年）まで西宇和郡にあった村で、現在の伊方町中部・佐田岬半島のほぼ中央に位置する農漁村であった。

町村合併により瀬戸町を経て、現在は伊方町です。



北を伊予灘に、南は宇和海に面しており、中央には半島を形成する山地が横わたっており、国道197号線が走っている。

伊予灘側は総じて険しい海岸線が続くが、半島の北側最大となる入江、三机湾がある。

三機の歴史は古く、その地名の由来は「御着江」とも書き、宇佐八幡の分霊が漂着した地とされている。

藩政期には、宇和島藩のみならず薩摩藩や熊本藩などの参勤交代の中継地でもあった。

御鼻（佐田岬半島突端）回りを回避し、危険を避けるとともに、経路短縮しようという構想で、1610年、宇和島藩主・富田信高により、三机湾最奥の小振と宇和海側の塩成間（幅700mと半島最狭

部) の堀切掘削工事を開始、しかし 1612 年壮大な計画であったが中止、多数の人員が動員され、村人は困惑していたこともあり、村人の中には三崎観音の祟りではないかとの噂が立ったという。

後に宇和島藩に入った伊達家は北の要所として三机を重視し、番所を置いた。



参勤交代のルートは、いったん半島にあがり、三机に入って、また船に乗り換えるルートとした。



中継地としての三机には、主要な商家や町屋が形成され繁盛した。

明治以降、番所跡に小学校を開設、三机郵便局開設・三机巡查屯所開設・登記開設がされるなど、明治 22 年三机村となる。

漁業組合も設立され漁業は一段と盛んとなる。

同時に三机港～三津浜港（松山市）、三机港～宇品港（広島市）の定期航路開設など村の繁栄は続いた。

昭和に入り、三机湾はハワイ真珠湾を想定して、海軍特殊潜航艇の訓練地となり、1941 年（昭和 16 年）特殊潜航艇は真珠湾に突入、太平洋戦争が開戦、三机湾で訓練した若い乗務員 9 名が戦死した。

戦死後、彼らは「軍神」と呼ばれ「九軍神慰霊碑」が建立された。

開戦から 78 年となる昨年 12 月 8 日、三机須賀公園の碑の前で、若い 9 名の乗務員を偲ぶ慰霊追悼式があり、地元青年団と海上自衛隊の関係者が平和を祈った。

この須賀公園の近くの防波堤に赤灯台「三机須賀防波堤灯台」が建っています。

防波堤は釣り場としても人気があり、釣堀のようでもあります。

また、灯台へ向かう途中から、次回紹介の襖鼻灯台（ふすまはなとうだい）が建つ岬が一望でき絶景です。

○三机須賀防波堤灯台要項

所在地 愛媛県西宇和郡伊方町三机港

塗色・構造 赤色、塔形

灯 質 等明暗赤光 明 3 秒暗 3 秒

光達距離 4 海里（約 8 km）

高 さ 地上から構造物の頂部まで 9.2m

平均水面上から灯火まで 13.6m

地上から灯火まで 9.1m

点灯年月日 昭和 26 年 3 月 20 日

★「大八車」No.2 1 8（令和 2 年 3 月 10 日発行）掲載分

○ 三机港周辺画像



